

【 復活讃詞 第7調 】

ハリスト スか み よ 、 なんぢは じゅうじ か に て し を  
 神 爾 十 字 架 死  
 ほ ろ ぼ し 、 と う ぞ く の た め に ら く え ん を ひ  
 滅 盗 賊 の た め に 楽 園 開  
 ら き 、 け い こ う ぢ ょ の か な し み を な ぐ さ  
 携 香 女 悲 慰  
 め 、 し と に なんぢが ふ く か つ して 、 せ か 界  
 使 徒 爾 復 活 世 界  
 い に お お い な る あ わ れ み を た ま い し を つ た え  
 大 憐 賜 傳  
 さ せ た ま え り 。

【 断酪主日のコンダック 第6調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、  
 光 榮 父 子 聖 神 歸  
 い ま も い つ も よ よ に ア ミ ン。  
 今 何 時 世 世  
 え い ち を た ま い 、 ぜんちを あ た う る しゅ 、  
 睿 智 賜 善 智 與 主  
 む ち の も の の きょう ど う し 、 ま づ し き も の の  
 無 智 者 教 導 師 貧 者  
 ほ ご しゃ た る しゅ さ い よ 、 わ が こ こ ろ を か 堅  
 保 護 者 主 宰 我 心 堅

た め て さ と ら し め た ま え 、 ち ち の こ と ば  
 悟 給 父 言  
 よ 、 な ん ぢ わ れ に こ と ば を あ た え た ま  
 爾 我 言 與 給  
 え 、 け だ し み よ 、 わ が く ち は も だ さ ず し て  
 蓋 視 我 口 黙  
 な ん ぢ に よ ぶ 、 じ れ ん な る し ゅ よ 、 わ れ お ち い  
 爾 呼 慈 憐 主 我 陥  
 り し も の を あ わ れ み た ま え 。  
 者 憐 給

司祭) ( 黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拝せられ、 萬物を無より有と  
 なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、  
 願う者に智慧と明悟とを與え、 罪を行ふ者を棄てずして、 其救の爲に痛悔  
 を立て、 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な  
 る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と  
 なしし主宰よ、 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾の仁慈を  
 以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が靈と體と  
 を聖にし、 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、 聖なる  
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、 今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め  
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い  
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ  
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅  
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。  
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ  
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う  
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 殺 聖 常 生 者 我 等 を  
 あわれめよ。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國  
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 提綱 (プロキメン) 主日第8調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。  
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

しゅなんぢらのかみにちかいをなしてつくの  
 主 爾 等 神 誓 作 償  
 えよ、

誦經) 神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに大なり、

しゅなんぢらのかみにちかいをなしてつくの  
 主 爾 等 神 誓 作 償  
 えよ、

誦經) 主爾等の神に



【 使徒經 (アポストロス) 112 端 ロマ書 13 章 11 節～14 章 4 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup> 聖使徒パヴェルが<sup>じん たつ</sup> ロマ人に<sup>しよ よみ</sup> 達する書の讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹みて<sup>き</sup> 聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>いま</sup> 今は我等が<sup>はじ</sup> 初めて<sup>しん</sup> 信ぜし<sup>とき</sup> 時に<sup>くら</sup> 較ぶれば、<sup>すくい</sup> 救は<sup>さら</sup> 更に我等に<sup>ちか</sup> 近し。<sup>よるす</sup> 夜過ぎて<sup>ひる</sup> 晝

<sup>ちか</sup> 邇づけり、<sup>ゆえ</sup> 故に我等<sup>おこない</sup> 昏昧の<sup>のぞ</sup> 行を除きて、<sup>こうめい</sup> 光明の<sup>よろい</sup> 甲を<sup>き</sup> 衣るべし。我等<sup>われら</sup> 晝に<sup>あ</sup> 在るが<sup>ごと</sup> 如

く、<sup>おこない</sup> 行を<sup>うるわ</sup> 美しく<sup>とうてつおよ</sup> すべし、<sup>ちんめんこうしよくおよ</sup> 饕餮及び<sup>じゃし</sup> 沈湎<sup>そうとうおよ</sup> 好色及び<sup>しつと</sup> 邪侈、<sup>しつと</sup> 争鬪及び<sup>しつと</sup> 嫉妬すべから

ず。<sup>すなわちなんぢら</sup> 乃爾等<sup>わ</sup> は我が<sup>しゅ</sup> 主イイスス<sup>き</sup> ハリストスを<sup>にくたい</sup> 衣よ、<sup>おもんばかり</sup> 肉體の<sup>よく</sup> 慮を<sup>へん</sup> 慾に<sup>なか</sup> 變ずる勿

れ。<sup>しん</sup> 信の<sup>よわ</sup> 弱き<sup>もの</sup> 者は、<sup>いけん</sup> 意見を<sup>なじ</sup> 詰らずして<sup>これ</sup> 之を<sup>い</sup> 納れよ。<sup>けだしあるひと</sup> 蓋或人は<sup>およそ</sup> 凡の<sup>もの</sup> 物<sup>くら</sup> 食うべしと<sup>しん</sup> 信

じ、<sup>よわ</sup> 弱き<sup>もの</sup> 者は<sup>やさい</sup> 野菜を<sup>くら</sup> 食う。<sup>くら</sup> 食う者は<sup>もの</sup> 食わざる<sup>くら</sup> 者を<sup>もの</sup> 藐る<sup>あなど</sup> 勿れ、<sup>なか</sup> 食わざる者は<sup>くら</sup> 食う者を<sup>もの</sup> 食う者を

<sup>ぎ</sup> 議する<sup>なか</sup> 勿れ、<sup>けだしかみ</sup> 蓋神は<sup>かれ</sup> 彼を<sup>い</sup> 納れたり。<sup>なんぢ</sup> 爾は何<sup>なんびと</sup> 人にして<sup>たにん</sup> 他人の<sup>ぼく</sup> 僕を<sup>ぎ</sup> 議するか、<sup>かれ</sup> 彼は<sup>おのれ</sup> 己の

<sup>しゅ</sup> 主の<sup>まえ</sup> 前に<sup>た</sup> 立ち、<sup>あるい</sup> 或は<sup>たお</sup> 倒る。<sup>かつかれ</sup> 且彼は<sup>た</sup> 立てられん、<sup>けだしかみ</sup> 蓋神は<sup>これ</sup> 之を<sup>た</sup> 立つるを<sup>よく</sup> 能す。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 今は、わたしたちの救が、初め信じた時よりも、もっと近づいているからである。夜はふけ、日が近づいている。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか。そして、宴樂と泥酔、淫乱と好色、争いとねたみを捨てて、昼歩くように、つましく歩こうではないか。あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満たすことに心を向けてはならない。信仰の弱い者を受けいれなさい。ただ、意見を批評するためであってはならない。ある人は、何を食べてもさしつかえないと信じているが、弱い人は野菜だけを食べる。食べる者は食べない者を軽んじてはならず、食べない者も食べる者をさばいてはならない。神は彼を受け入れて下さったのであるから。他人の僕をさばくあなたは、いったい、何者であるか。彼が立つのも倒れるのも、その主人によるのである。しかし、彼は立つようになる。主は彼を立たせることができるからである。

\*\*\*\*\*

司祭) <sup>なんぢ</sup> 爾に<sup>へいあん</sup> 平安、

誦經) <sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>しん</sup> 神にも、ア ril l i ya、

【 アリルイヤ 主日第8調 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

誦經) <sup>きた しゅ うた かみわ すくい かため よ</sup> 來りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

誦經) <sup>さんよう もつ そのかんばせ まえ すす うた もつ かれ よ</sup> 讚揚を以て其顔の前に進み、歌を以て彼に呼ばん、

アリル イ ヤ、アリル イヤ、  
ア リル イ ヤ。

司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ</sup> 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

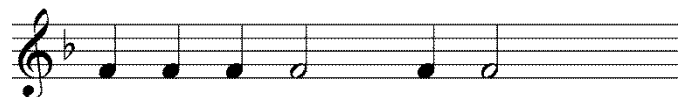
<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

<sup>いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ</sup> て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

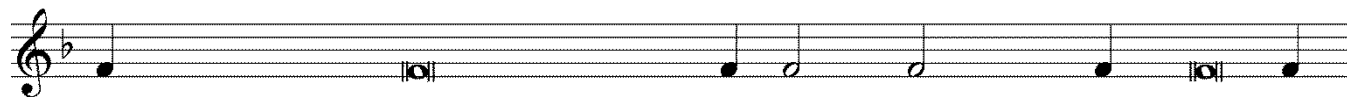
【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書17端 6章14~21節 】

司祭) <sup>えいち つつし た せいふくいんけい き</sup> 睿智、<sup>しゅうじん へいあん</sup> 肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



なんぢのしんにも。  
爾 神

司祭) <sup>でん せいふくいんけい よみ</sup> ルカ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 光 榮



はなんぢにきす。  
爾 歸

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聴くべし、

司祭) <sup>しゅい も なんぢらひと そのあやまち ゆる なんぢら てん ちち なんぢら ゆる も</sup> 主曰えり、若し爾等人に其過を免さば、爾等の天の父は爾等にも免さん、若

<sup>ひと そのあやまち ゆる なんぢら ちち なんぢら あやまち ゆる またなんぢらものいみ</sup> し人に其過を免さずば、爾等の父も爾等に過を免さざらん。又爾等齋す

<sup>とき ぎぜんしゃ ごと うれ さま ななか けだしかれら そのものいみ ひと あらわ ため</sup> る時、偽善者の如く憂わしき容を爲す勿れ、蓋彼等は、其齋の人に顯れん為に、

<sup>かおいろ そこな われまこと なんぢら つ かれら すで そのむくい う なんぢものいみ とき こうべ</sup> 顔色を損う、我誠に爾等に語り、彼等は已に其賞を受く。爾齋する時、首

<sup>あぶら おもて あら なんぢ ものいみ ひと あらわ ひそか ところ いま なんぢ ちち</sup> に膏ぬり、面を洗え、爾の齋の人に顯れずして、隠なる處に在す爾の父

<sup>あらわ ため しか ひそか かんが なんぢ ちち あらわ なんぢ むく なんぢら ため</sup> に顯れん爲なり、然らば隠なるを鑒みる爾の父は顯に爾に報いん。爾等の爲

<sup>たから ち つ なか ここ しみ さび そこな ここ ぬすびとうが ぬす すなわちなんぢら</sup> に財を地に積む勿れ、此處には蠹と銹と損い、此處には盜穿ちて竊む。乃爾等

<sup>ため たから てん つ かしこ しみ さび そこな かしこ ぬすびとうが ぬす けだし</sup> の爲に財を天に積み、彼處には蠹も銹も損わず、彼處には盜穿ちて竊まず。蓋

<sup>なんぢら たから あ ところ なんぢら ところ あ</sup> 爾等の財の在る處には、爾等の心も在らん。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう。また断食をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきをするな。彼らは断食をしていることを人に見せようとして、自分の顔を見苦しくするのである。よく言うておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたがたは断食をする時には、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは断食をしていることが人に知れないで、隠れた所においてになるあなたの父に知られるためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いて下さるであろう。あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、

宝をたくわえてはならない。むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸

※聖体礼儀③（金口イオアン聖体礼儀）へ